

一般演題1 O1-7

高齢者に対する第1種装置を用いた酸素加压による高気圧酸素治療

工藤美雪¹⁾ 土田知佳¹⁾ 木村 彩¹⁾
 矢作尊章¹⁾ 石垣大介²⁾ 本田耕一³⁾

- 1) 済生会山形済生病院 ME機器管理室
- 2) 済生会山形済生病院 整形外科
- 3) 済生会山形済生病院 神経内科

【はじめに】

日本は超高齢社会を迎え、医療も高齢者を念頭に置いて行う必要がある。高齢者は認知力、環境への適応力が低下していることが考えられ、第1種装置を用いた高気圧酸素治療にあたってはより慎重な配慮が求められる。そこで、当院での治療例を調査し、高齢者に対する治療例が増えているのか、高齢者を治療するにあたってどのような問題点があるかを調査した。

【対象と方法】

当院ではSECHRIST社製 第1種高気圧酸素治療装置1台を保有し、酸素加压にて2ATA60分間の治療を行っている。平成19～30年度の過去12年間を調査期間とした。対象患者は75歳未満、75～84歳（後期高齢者）、85歳以上（超高齢者）に分類し、年齢構成の経年変化、治療中止に至った例について後ろ向きに調

査した。

【結果】

HBO施行は509例4700件、男性344例、女性165例、施行時の年齢は14歳から93歳（平均63.9歳）、1例あたりの治療回数は1～50回（平均9.2回）であった。年齢構成は75歳未満358例（70.3%）、75～84歳124例（24.4%）、85歳以上27例（5.3%）であり、3年毎の経年変化は75歳以上の例は平成19～21年度の21.9%が平成28～30年度は36.2%へと増加していた。（図1）治療中止例は75歳未満24例（6.7%）、75～84歳13例（10.5%）、85歳以上5例（18.5%）の合計42例であり、高齢者の中止率が高かった。（表1）75歳以上の中止理由は75歳未満と比べ不穏・せん妄2例（11.1%）、尿意・便意4例（22.2%）が多い傾向があった。

【考察】

75歳以上の高齢者に対する治療は増加傾向にあり、治療中止率も高い傾向にあった。高齢者は合併症を抱えていることが多く、聴力、認知力の低下に伴い、治療に対する理解力が得られにくいことがあるため、若年者以上に配慮を要することが考えられる。我々従事者は高齢者が安心して治療が受けられるよう信頼関係を築くとともに、高齢者の特性を理解して治療に臨むことが必要であると考ええる。

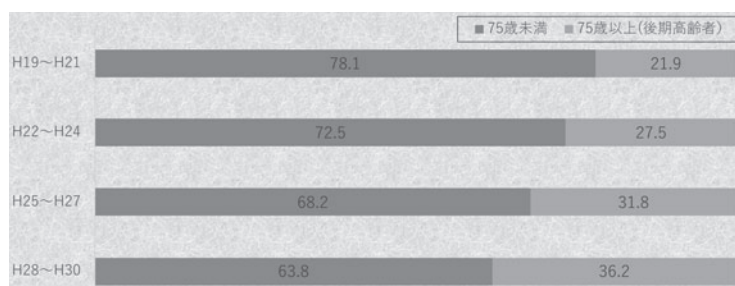


図1 年齢構成の経年変化

表1 年齢構成別の治療中止率

年齢区分	症例数	治療継続例	治療中止例	中止率 (%)
75歳未満	358	334	24	6.7
75～84歳	124	111	13	10.5
85歳以上	27	22	5	18.5

Fisherの直接確率検定